

久保家資料について

久保家の最初は、高遠藩臣下代々録によると、藁科十之丞が貞享2年(1685)年御供番に召し出されました。その後、一時大庭姓を名乗りましたが、藩校進徳館の軍学師範となった藁科勘左衛門の頃から、再び藁科姓に戻っています。

安政3年(1856)、命により八代藩主内藤頼直公の生母久保菊の生家久保家を、藁科勘左衛門の次男尚友が継ぐことになりました。しかし、尚友が早世したため、再び藁科家から三男の尚彪(讓次)が久保家に養子に入りました。

この資料における久保家は、藁科→大庭→久保と、変遷しました、文久2年(1862)久保家を継承した久保讓次は、明治4年(1871)4月慶応義塾における勉学を終え高遠に帰国、同年8月、進徳館の英学科設立に伴い、教授に任命されました。間もなく「筑摩県学」の洋学舎長として赴任しました。

久保讓次の長男得二(天随)は、明治8年(1875)に生まれ、東京帝国大学院を出た後、長年著述業に従事しました。漢文学研究によって文学博士になり、後に台北帝国大学教授を務めました。

久保家資料の大半は、天随が「帝國文学」「斯文」等文芸誌に寄稿した、膨大な著作の<写>です。また、英語やドイツ語に堪能だった天随が翻訳した「エルテル」「酔人の妻」等の図書も含まれています。

少年期、碁を褒められた天随、後に「ああいうものは、先人を超す独創力を振るうことが出来ないから、全く下らないものだ。やるなら他人に出来ない事、全く新しい事だけをやれ」と言ったそうで、これが庭訓だったと長男の久保舜一氏は記しています。

平成15年より折々久保家等先祖の資料を始め「消えゆく世代(とき)を求めて」(1~28)と題した大部の記録集を、当館へ寄贈して頂きました。

平成21年4月
伊那市立高遠町図書館